

内モンゴルの伝統文化が影響する 造形教育における幼児の感性形成

渡辺 一洋¹⁾

Child Identity Formation Seen in Art Education Influenced by traditional Inner Mongolian Culture

Kazuhiro Watanabe¹⁾

Abstract

This research investigates arts education being carried out jointly at educational facilities for young children (mainly kindergartens are targeted here) by the Inner Mongolia University for the Nationalities and the College of Fine Arts within the university, which are located in the Inner Mongolia Autonomous Region. Many works of art have been passed down through Inner Mongolia's long history, including traditional native costumes and ethnic handicrafts, and it is thought that these also exert many influences on modern arts education. Through the educational facilities for young children, we conducted investigations and discussions of historical changes and developments in arts education in Inner Mongolia up to modern times. Based on these, we carried out comprehensive analysis by using field surveys of the curricula and educational methods of educational facilities for young children currently being carried out, while focusing in particular on the originality of colors and shapes being used in arts education that exhibits traditional aspects.

Key words : Inner Mongolia, child art education, traditional ethnic culture

キーワード : 内モンゴル, 幼児の造形教育, 伝統的民族文化

1. 研究の課題と目的

本研究は、内蒙古自治区（通遼市）^{※1)} に所在する内蒙古民族大学及び同大学内に所在する研究機関である美術学院とともに共同で取り組む内モンゴルにおいて展開されている幼児の造形教育に関する研究であり、特に感性の形成という視点から調査及び考察を進めていくことを研究課題とする。内モンゴルは、長い歴史や地域風土に育まれた伝統的な民族衣装や民族工芸が数多く残されており、独自性のある形や色彩感覚が受け継がれ、幼児期の造形作品において、表現となっ

1) 育英短期大学保育学科

て現れている傾向が推察できる。

筆者は、内モンゴルにおいて、現在も遊牧民の歴史を背景にもつ風土から形成されている幼児や大人の牧歌的な造形作品に関心を抱き、数年前より、内蒙古民族大学美術院に所属するスタッフとともに、日本の美術教育と比較しつつ、内モンゴルの関連資料収集を重ねてきた。その中で、特に、筆者が保育士養成校に所属している立場からも幼児の造形教育を中心にして、議論を行いつつも、フィールドワークを企画して、2012年9月に現地を訪れ、内蒙古民族大学、内モンゴルの小学校、幼稚園、さらに、関連した教育関係機関、文化施設を訪問し、実態調査、面接調査、並びに文献・資料の収集を行った。また、それらを踏まえた上で、日本と内モンゴルの美術教育を比較研究した分析を行い、双方の美術教育が各発達段階にとって、どのような教育的価値を持つのか、また、美術教育を扱う教員の養成(現地では、美術を専門とする幼児教育者も多くいる)とも関連させながら、美術教育の課題や問題点、有効性、発展性について検討した。その上で、2013年9月に、外モンゴル・ウランバートル市を訪問し、内モンゴルの訪問場所と同様に、小学校、幼稚園、さらに、関連した教育関係機関、文化施設を訪問し、考察を進めた。

これらのフィールドワークは、地域風土と造形作品の密接な結びつきを検証するとともに、幼児期に形成される感性が表現に発展していく造形思考の仕組みにおいて、さらに、深く着目する機会に至った。そこで、以上のような経過を基盤にしなが、その調査経過を示しつつも、本研究においては、特に、内モンゴルの地域風土を通じた幼児の感性の形成過程や教育方法などを明らかにしていきたい。その中から、現状で進められている感性を育む特色のある造形活動の手がかりについて導き出すことを目的とし、重ねて、外モンゴル・ウランバートル市についても、同様のテーマから調査経過を述べていくことにする。

2. 連携研究機関・内蒙古民族大学及び同大学内に所在する美術院について

ここでは、まず、連携研究機関である内蒙古民族大学及び同大学内に所在する美術学院における美術教員養成を主とする美術教育の教育形態について、まとめることにする。内蒙古民族大学は、50数年の歴史を持つ内蒙古師範学院、内蒙古医学学院、ジリム牧畜学院の3校が合併し、2000年6月に内モンゴル自治区東部の通遼市に創立された総合大学(総敷地面積236.6万平方メートル、校舎建築面積352,782.99平方メートル)である。専任の教員は1,048人であり、現在までに14万人を越す様々な人材を社会に送り出している。

また、以下(表1)^{#2)}のような18つの研究機関があり、国際的かつ様々な分野の研究が行われている。

表1 内蒙古民族大学の18つの研究機関

人文学院、政法・歴史学院、教育科学学院、数学学院、コンピューター科学学院、化学学院、蒙古薬学院、物理・機電学院、臨床医学学院、農業学院、蒙古学学院、動物科学学院、体育学院、外国語学院、看護学院、大学外語教育部、マルクス主義学院、美術学院、音楽学院、コミュニケーション学院、国際交流学院、成人教育学院、生命科学学院、機会工程学院、経済管理学院等25の単科学院、図書館、インターネットセンター、学校新聞編集部、分析・測定センターの6部署、後方勤務サービス会社、2つの附属病院、そして、世界史研究所、ホルチン文化研究所、計算・物理研究所、作物栽培・耕作研究所、種子研究所、蒙古医薬研究所、凝集態物理研究所等
--

本研究では、表1の様々な研究機関の中で、美術学院に協力を依頼し、美術学院スタッフとともにフィールドワークやシンポジウムを開催することとした。美術学院では、日本の教員養成校と類似した美術教育のカリキュラムが組み立てられており、伝統的な西洋画や版画の技法を始めとして、パソコンを用いたデザイン実習も行われていた。絵画実習の作品(図1)は、男性モデルのデッサンやドローイングの他、油彩の着色による人体の形と表現方法について、絵画表現を通して、学んだ作品が展示されていた。

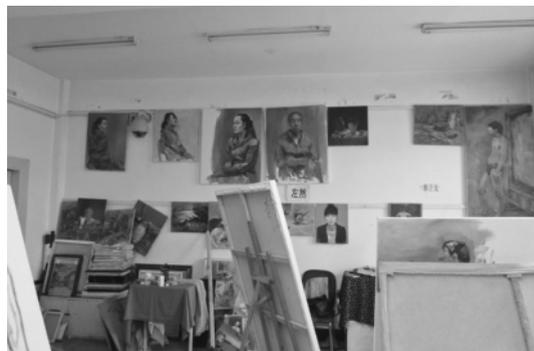


図1 美術学院内のアトリエ

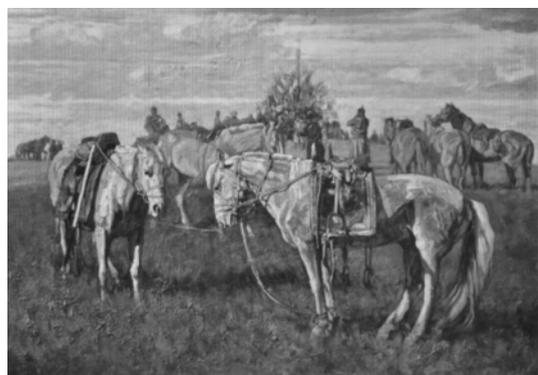


図2 画題:「HUMAN & HORSES」(油彩)
(2011年作, 180×130cm)



図4 画題:「祈副」(油彩)
(2011年作, 150×130cm)



図3 画題:「博克手」(木版画)
(2011年作, 108×75cm)



図5 画題:「新しい娘」(油彩)
(2011年作, 108×75cm)

図2は、草原の馬群であり、そこに関わる人間像を重ね合わせた内モンゴルの草原の風景である。内モンゴルにおいて、馬は、神として考えられており、動物の中でも特別な存在として位置づけられている。図2の作者は、美術学院のスタッフであり、美術学院における夏の集中講義において、草原のゲル^{※4)}で合宿をし、そこでスケッチした作品を基にして描いたことを語ってくれた。図2の作品は、伝統的な写実表現を学びながらも独自の地域風土やイメージを作品の中から捉えようとしている印象が鑑賞者に発信されてくるようである。

一方、図3～5は、いずれも女性の画家であるが、力強い線や作風が感じられる。どの作品を見ても、内モンゴルの中の牧歌的な雰囲気や家畜と共に生きる遊牧民への眼差しが根強く作品の中に構成されていると考えられる。これらの作品を見ても感じられるように、内モンゴルにおいて、作家活動を行っている多くの作家は、強い土着性が内在し、内モンゴルの風土に根ざした絵画表現を進めている表現内容が鑑賞者に伝わってくる特性がある。

3. 内モンゴルにおける幼児の造形活動の実態

(1) 内モンゴルが所在する中国における幼児の造形活動の傾向

前述した内モンゴルの現代作家の絵画作品を踏まえて、次に内モンゴルが所在する中国における、幼児の美術教育について、ここで、確認しておきたい。中国において、幼児の美術教育は日本と同じように盛んに行われている。そこで、上海のS幼稚園の実践事例を通して、実際の指導内容の概要を見ることにしたい。

①事例1：「貼り絵」(3歳児)

3歳児の造形活動は貼り絵を主としている。貼り絵で問題となるのは、年少の幼児は絵画の正しい向きがわからないことがあり、幼児は、貼る材料を上向き、下向き、左向き、右向き、あるいは、別の方向に意のままに貼る傾向にある。そこで、幼児にも取り組みやすく、理解が容易になるように、幼児の生活に根ざした題材を用いて、幼児の貼り絵の技術を育てている。具体的な流れは以下のようなものである。

- ①貼り絵への興味を育てる
- ②容易なものから難しいものへ段階的に進める。幼児が方向性のない貼り絵をうまく自分のものにすることができた後は、方向性のある貼り絵を取り入れる。
- ③教師が貼り方の手本を示す。

②事例2：「図画の創作」(4歳児)

幼児の美術教育には多くの要素が含まれるが、図画の創作(お絵かき)は極めて重要な部分を占めている。4歳児は、色々な図形を選択・組み合わせ、人や物の特徴や簡単な動きを表現する方法を身につけることを重視する。

- ①絵を図形として集約するよう幼児を導く。
- ②図形の組み合わせを用いると、幼児が物の形や構造を把握するのに役立つが、これには観察が最も重要となる。例えば、アヒルを描くとすると、ある幼児は円、半円の組み合わせだと

考える。一方、他の幼児が考えたのは円と楕円の組み合わせである。両方ともアヒルのかわいらしい形を表現することができる。

③組み合わせの合理性に注意する。

③事例3：「人物の動きを描く」（5歳児）

5歳児は、事物間の簡単な重なりを理解する能力を有し、簡単な動きを描画できるようになる。しかし、幼児の思考はまだ直感的、具体的、イメージ的であり、それは幼児自身の生活や認識や経験と直接的なつながりを持っている。したがって教師は、幼児の実際の経験を基に指導しなければならない。^{註5)}

これまで、取り上げてきたS幼稚園の3つの実践事例を見てみると、中国における幼児の美術教育における造形活動は、「技術」に重点が置かれていることが考えられる。このような教育傾向は、内モンゴルにおける幼児教育施設においても各年齢の幼児の造形活動において、類似して見られた。すなわち、感性という出発点を重視した日本の幼児の美術教育と比較してみると、「技術を学ぶ中で感性が育まれる」という教育視点を見出していくことができる。このことについて、さらに検証を進めるためにも、次に実際の現地調査に基づきながら述べていくことにしたい。

なお、ここで改めて、本稿における「感性」の意味を捉えておきたいが、筆者は、「幼児が音、言葉、視覚的な画像などの外的な情報材料を幼児自身の身体の中にある機能を用いて五感から内部に取り入れる中で、それらの情報材料を自分の中で整理したり、変化させたりしながら、創造することによって、外部へ言葉や音、身体表現、視覚的表現として、他者に発信し、コミュニケーションを生み出していくこと」のサイクルにおける下線部の部位を「感性」として、定義していることを確認しておきたい。

(2) 内モンゴルにおける幼児の造形活動と作品を通して

感性を形成する要因として、幼児期に過ごす生活環境や体験は、表現活動において様々な形で表出していく。そこで、内モンゴルの幼児の造形活動に実際に接するために、現地の幼児教育施設に訪れた(2012年9月)。図6及び7は、施設内の様子であるが、近代的な建築の中で幼児への教育活動が行われており、内部の壁面には、内モンゴルの文化を感じさせる装飾が施されていた。



図6 内モンゴルの幼児教育施設の様子



図7 内モンゴルの幼児教育施設内の壁面

図8は、幼児教育施設内の展示作品である。展示されている作品を鑑賞してみると、形を丁寧に描いたり、色彩に注意を置いた絵画教育の姿勢が見られる。また、空間の中に、造形作品を取り入れつつ、躍動感のある演出をしていこうとする指導者側の環境デザインが見受けられ、室内の作品や製作の雰囲気は、日本の造形活動の製作風景と大きく異なることはないが、着目点としては、「塗り絵」が大変盛んであることが見受けられた。各作品は、年長児の作品であるがクレヨンや色鉛筆を用いた着彩がなされており、多様な塗り方や色彩の用い方の現れから、「塗り絵」という表現の中にも幼児のメッセージが多く詰め込まれていた。

全体的には、内モンゴルの幼児の造形活動については、前述した中国の教育事例のような技術的な面が配慮された「塗り絵」が盛んでありながらも、今後、情報化やグローバル化の中で、歴史的な風土を残しつつも新しい形式の造形活動について探求している状況は、現地取材の際のシンポジウム（図9）の中で議論された大きなテーマでもあった。

(3) 内モンゴルにおける小学校の造形活動について

内モンゴルの現地調査の中で、幼児教育施設の造形活動に着目した取材をしてきたことは、前述の通りである。その上で、幼児期を過ごした幼児が次に進む教育機関となる小学校の造形活動についても並行して視察することとした。日本の小学校における学習指導要領の図画工作では、1977（昭和52）年の改訂で「造形遊び」の理念と内容が小学校低学年に取り入れられ、1989（平成元）年には「表したいこと、つくりたいものをつくり出すよるこび」という表記が示された。一方、中国では、日本の図画工作科学習指導要領にあたる「全日制義務教育美術課程基準」が2001年7月に制定された。

また、内モンゴルにおいてもバヤンタリヤ地域の小学校で使用されている美術の教科書にも造形的なものづくり教育の題材が掲載されている。包（2010）は、この教科書を分析し、造

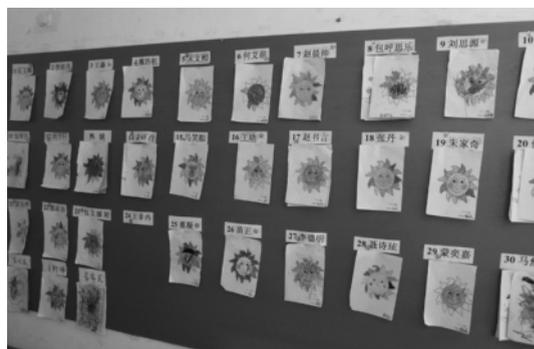


図8 内モンゴルの幼児教育施設内の壁面展示作品



図9 内モンゴルの幼児教育施設の教師を交えたシンポジウムの様子



図10 内モンゴルに所在する小学校における絵画製作の授業場面

形的なものづくり教育の題材内容や活動に使われる材料がバヤンタリヤ地域の小学生の生活実態から離れたものであることを指摘し、小学生が意欲的なものづくり活動や感性を育成するには困難であることについて問題提起している。^{※6)}ここでは、地域の中にある自然環境や社会環境が幼児の精神活動に影響をもたらし、生き方や心のよりどころにつながることを指摘し、幼児の生活様式を基盤に置いて、「地域の良さを活用しながら創造的で個性豊かな造形的なものづくり教育」が不可欠であることについて示唆している。

関連して、筆者の渡辺(2014)^{※7)}は、日本の地域風土と四季を通したのものづくりの検討によって、感性と幼児の生活環境がものづくりとしての表現行為に影響を与えるサイクルについて、実践例を重ねながら考察を行った。この経過において、包(2010)と同様に地域性を重視した表現活動の有効性を導き出している。

また、内モンゴルの小学校における造形活動においては、圧倒的に「対象を忠実に描く」活動がほとんどであり、お手本となる図柄や写真の入った教科書を基に模写する活動が行われていた。小学生は、それらの参考となる画像の形をじっくりと観察しながら、描画を進めていた。



図11 内モンゴルに所在する小学校の小中学生による
絵画作品(中学年)

(4) 内モンゴルにおける地域性と教育の動向

これまで、内モンゴルの幼児教育施設及び小学校における特に造形教育について着目しながら、現地調査を基に述べてきた。ここで、改めて内モンゴルの教育の現状について確認していくことにする。内モンゴルが所在する中国は多民族文化の融合、同化による歴史において単一な漢民族教育ではなく、様々な民族言語、文字、文化のある多民族教育が行われている。全中国総人口に占める割合が9%に過ぎない55の少数民族には、約130種の言語があり、53の少数民族はそれぞれ自民族の言葉を持っている。また、21の民族が27種の民族文字を使用し、そのうちの一部民族は複数の文字を使っている。

中国の北西部に位置している内モンゴル自治区は、北はモンゴル・ロシア連邦と国境を接し、北東から南西に延びる細長い地形になっており、標高1,000~2,000mの高原が広がっている。高原の大部分は草原であるが、西にはパタンチリン・テングリ・ウランブハ砂漠がある。古くから遊牧民の地であり、中国の歴史とは異なる歩みを経てきた。清末期に内モンゴルと外モンゴルが分離し、清朝中央の支配下に組み入れられた。内モンゴルの教育沿革から見れば、その発展としては、清末・民国と中華人民共和国という三段階に分けることができる。

1978年には、中国国内体制の改革及び対外開放の政策が打ち出され、その後、中国全土で実施された。この教育開放の政策によって、内モンゴル(自治区)を含む中国全土で経済は大きな発展を遂げてきた。民族教育は内モンゴル教育全体の最も大切な一環であり、モンゴル民族の言語と文化の維持やモンゴル民族の文化的自立、さらに、民族地域の経済成長や発展などにも関わる大きな問題の一つとなった。

中国の他の地域と比べ、内モンゴル自治区の経済的成長・発展は立ち後れた状態を見せてきた。このように経済的発展の立ち後れと経済体制の転換のために民族地域の教育方針や政策なども多くの不安定な要素を含むようになってきた。

現在、内モンゴルの広大な草原では牧畜が盛んであるが、以前のような遊牧のスタイルはほとんどなくなりつつある。さらに、2002年から、遊牧は乾燥化を招くとして、全面的に放牧が禁止された。現在では、集落に定住して牧畜を行うようになり、観光用のパオ（遊牧民が使う移動式テント）によって民族語、文字の使用率が一層低くなってしまっている。現在の中国少数民族の二言語教育を見てみると、①モンゴル、朝鮮族型、②ウイグル、カザフ、チベット族型、③南方少数民族型の3種類^⑧に分けられる。

関連して、Bulag(2009)^⑨は、内モンゴルの放牧社会における家畜と小学生の関わりから、心身の発達について考察を行っている。Bulagは、マラチン^⑩による小学生が家畜を世話する中から、観察力、集中力、判断力、責任感が養われることを示唆し、衛生面でも自分で注意しようとすることや家畜の死や別離による生命の尊重などについて述べている。このような一連のテーマは、感性教育という面においても大変着目できる内容である。また、トリゲルら(2012)^⑪は内モンゴルにおいて、実際に地域性を生かした小学校における美術教育の実践授業を展開し、民族の伝統文化、信仰、伝説、習俗による表現としての民間美術と地域に応じた小学校の美術教育についての実践研究を行っている。

内モンゴルの小学生の造形活動においては、以上のような歴史的な背景や風土、生活環境による密接な関係性があり、その中から形成されていく造形行為や感覚において、深い意味があることが予測できる。なお、以下の図12及び13は、近年、内モンゴルに設立された歴史民族博物館の展示品であるが、独自性のある色彩や物の形体においても興味深く鑑賞することができる。



図12 モンゴル相撲の衣装（内モンゴル）



図13 内モンゴルの民族衣装

4. 外モンゴル（ウランバートル市）における幼児の造形活動の実態

(1) ウランバートル市の幼児教育施設を通じた造形教育の指導方法について

これまで内モンゴルの美術教育における調査を基に、その動向などについて述べてきたが、こ

ここで、所在地や歴史は異なるが、外モンゴルの首都・ウランバートル市¹²⁾における調査（2015年9月実施）についても参考材料として確認しておきたい。ウランバートル市は、モンゴル国の中でも人口の半数近くが集中して居住していることもあり、車の交通渋滞なども多い街である。この地で、幼児教育を行う幼児教育施設（図14）を訪れ、内モンゴルの教育動向とも比較しながら、検討を進めることにした。

ウランバートル市の幼児教育施設においては、幼児教育において、国の幼児教育指針に沿ったテキスト（図15）が用いられ、幼児の造形活動においては、クレヨン画や切り絵の他、砂絵、壁面装飾など、日本の幼児の造形活動と同じような材料によって実践が行われていた。また、幼児の各発達段階に沿ったプログラムや指導方法が検討され、その上で日常の幼児の造形作品製作への指導や対応なども配慮されていた。さらに、パーソナルコンピュータを用いたデザイン、CGや音響を用いた幼児の造形教育教材なども開発されており、先端的な教材を幼児の造形教育の中で用いようとする動向も見られた。

現地の保育者への面接調査からは、歴史や風土を大切にし、そのことを踏まえた上で新しい造形教育の形を探求していこうとする考え方についても確認することができ、全体的に骨組みのしっかりした幼児の造形製作の指導への取り組みを目の当たりにする機会にもなった。

（2）草原の遊牧民と美術教育

次に、ウランバートル市から車で3時間ほど走った草原のゲルに暮らす遊牧民の幼児がどのような造形活動を行うかという側面から、地域風土と感性の関係性を考えていきたい。筆者は、草原において馬や羊、牛とともに暮らす現地の遊牧民を訪ねた（2015年9月実施）。ウランバートル市における幼児の造形活動については、前述のような先端的な取り組みについて、実践や作品を見ることができたが、歴史的風土の中の、いわゆる遊牧民としての造形活動を通して、白紙の紙を渡した時に、幼児がどのような絵を描くのかについてのイメージを確認するため、ここで、自由画というテーマを与えた時に、幼児が描いてくれた絵を紹介することにした。

筆者は、家族6名でゲルに暮らす遊牧民を訪ねた。当日、案内役のスタッフが半年前に会ったという、その家族を訪ねたが、家畜の草を求めて移動していくため、半年前のその場所には居住しておらず、新たな生活場所を求めて移動した遊牧民と出会うまでに、何度か車で思い当たる場所を探しつつも、訪ねる機会をもつことができた（図16及び17）。家畜の馬乳酒やチーズなどの食



図14 幼児教育施設の施設内の様子



図15 幼児教育施設で使用されているテキスト



図16 草原のゲルと遊牧民



図17 草原の馬

料を蓄えて生活する遊牧民は、幼児や小学生の頃から家畜の世話や家族の仕事の手伝いをしながら、その風土で生きていく方法を学んでいる。

筆者は、最初に日々の生活環境の中の暮らしや表現に関わる現地調査の際、出会った幼児や小学生に紙とペンを渡し、思い浮かんだイメージを自由に絵で表現してもらったこととした。この場では、小学校高学年（日本の年齢を基準とした）の女子は、太陽とゲルのある風景を描いた。また、小学校及び中学年の男子は、いつも世話をしている仲良しの馬を描いた。なお、この男子は絵を描くことに普段から大変興味を持っており、いくつかの水彩作品などを見せてもらったが、各作品には、自分自身が普段から生活している自然環境の中の風景が多く登場していた。一方、4歳の男児の絵には、太陽と草原、そして、自分自身の投影のような人物像が登場していた。

このように、モンゴルの草原で暮らす異年齢の幼児や小学生の作品を見ても、日常生活の風景や出来事が絵を描く時の感性や色彩、インスピレーションとして作品の中で表現されていることについて、改めて確認することができた。

また、外モンゴルにおいては、描画指導において以下のような幼児の感性を高める指導の特徴があることがわかった。

- ① 2歳児からボールペンをもつ練習をする。
- ② 絵を描く時には、指導する側が手伝って描く。
- ③ 幼児に対して、絵には「つぼ（ここでは、ポイント的な意味）」があることを伝達する。
- ④ 幼児がハサミを使って紙を切る行為については、心身の健康にもつながり、力加減などの感覚をつかむ意義もあることが指導の中で重視されている。
- ⑤ 描画指導の発展的段階としては、「洋服に色を塗る」→「動物を描く」→「自然について考えて描く」というように、年齢や指導内容を発展させながら、幼児の感性や描画技術を養っていく傾向がある。

①～⑤の内容は、生活環境と密接に結びついており、有機的なサイクルを持って、表現に結びついていると考えることができ、単に描画を楽しむというだけではなく、日々の生活の題材から絵画製作へと発展している要素を含んでいると考えられた。

5. 全体的考察

これまで、内モンゴルに所在する内蒙古民族大学及び美術院のスタッフと連携しながら、幼児の美術教育を通じた感性の形成を軸としながら、伝統文化の影響や教育方法について調査を進めてきた。研究の当初は、遊牧民としての伝統文化が色濃く表現活動に現れていることに関心を持ちながら、各教育機関や文化施設におけるフィールドワークを行っていた。その中で、幼児の美術教育の指導においては、日本の美術教育と同じように、指導のねらいや方針、造形材料の選択や環境設定などが入念に考えられていることについて、調査経過の中から明らかにすることができた。さらに、内モンゴルでは、感性を育むということに先攻して、「技術の習得」という面が重視されていることは、着目すべき点であった。

すなわち、「造形活動における技術の経験を繰り返すことから、感性が養われる」ことが内在しているという観点を基軸に置くことによる。この傾向は、中国における絵画の模写を通じた絵画技法習得という伝統的な絵画技法の流れとも捉えることができ、幼児教育施設においては、型を示した「塗り絵」も盛んに行われていた。加えて、前述したS幼稚園の各実践を見てみても、技法を重視した指導の傾向は明らかである。

また、次年度に進めた外モンゴル・ウランバートル市の幼児教育施設においても同様の傾向が見られ、その上で、CGや動画、映像を用いたパーソナルコンピューターを使った先端の技術を幼児の美術教育に取り入れられていることは、特に注目した教育動向であった。

一方で、内モンゴルの幼児教育施設における指導者とのシンポジウムにおいては、幼児の絵画を心理的な側面や描画の色彩、あるいは描画経過や傾向から分析していこうとする意見もあり、幼児の感性を深く見つめていこうとする姿勢も感じられ、実際の指導風景においても丁寧なカリキュラムや教育手法の基に伝統的な文化を残しつつも実践を進めていることを確認できた。同様に、外モンゴルの小学校においては、美術教育専門（日本では図画工作専科の教員にあたる）の教師も数人が存在し、テキストを用いた絵画教育に力を入れていることについては、特筆すべき部位であった。しかしながら、包（2010）⁶⁰⁾の指摘するような造形教育の教育方法においては、発展途上の側面も残されていることは今後の課題でもある。

内モンゴルの伝統文化を通じた美術教育においては、今後、数年の間にさらなる伝統文化と先端技術の共存する変化が見られることが予測される。それらは、自然環境の中で生きる生活感のある造形活動でもあり、人間の根源的な表現行為にもつながっていく重要な手がかりを含んでいることが考えられる。そこで、引き続き、動向を追いながら、内蒙古民族大学及び美術院との共同研究を進めていきたい。そのことによって、日本の幼児の造形活動への教育方法や感性の形成における伝統文化と先端技術のサイクルについて検討していくことにしたい。

なお、関連して、調査を進めた外モンゴル・ウランバートル市の幼児教育施設においても貴重な内容の幼児の造形活動に接することができた。この地における幼児の美術教育についても同時並行で引き続いて見つめながらも、考察を重ねていきたい。

謝辞

本研究は、平成24年度から平成25年度の二年間に渡る育英短期大学学内奨励研究において実施した研究調査を

まとめた内容となっている。調査実施の際には、内蒙古民族大学及び同大学内の美術学院（通遼市）の多くのスタッフに協力を賜り、現地の幼児教育施設や様々な教育機関、文化施設より貴重な内容を拝聴する機会となった。次年度には、モンゴル・ウランバートル市においても幼児教育施設などの調査において、現地のスタッフより手厚い協力を賜ることに恵まれた。ここに、深く感謝の意を述べさせていただきたい。

注

- 1) 内蒙古（モンゴル）自治区（Inner Mongolia Autonomous Region）は、中華人民共和国が1947年にモンゴルの南部に設置した省級の自治体。中国領土の北沿に位置する自治区である。
- 2) 内蒙古民族大学 HP (<http://www.admissions.cn/imun/index57.htm>)
- 3) 図2～5の作品については、『内蒙古当代女画家十一人作品集』、内蒙古人民出版社，2011及び『満迅油画作品集』、内蒙古草原油画院，2011の掲載作品から抜粋した。
- 4) 主にモンゴル高原に住む遊牧民が使用する伝統的な移動式住居。ゲルは円形で、中心にある2本の柱で支えられた骨組みによって、屋根部分には中心から放射状に梁が渡される。これに羊の毛で作ったフェルトをかぶせ、屋根・壁に相当する覆いをする。壁の外周部分の骨格は木組みで、菱格子に組んであり接合部はピン構造になっているので蛇腹式に折り畳むことができる。
- 5) 『生活に根ざした幼児の美術教育の実践例—創造性を育む新しい試み』、王艶・張奕・任妹，2005，CHILD RESEARCH NET (<http://www.blog.crn.or.jp/lab/01/05.html>)，「上海のS幼稚園」の先進事例を基に『学前教育—信息与研究』4号，2005，において掲載された文章を編集した内容となっている。
- 6) 『子どもの「生活」に根ざした造形的なものづくり教育の意義と授業構成の視点—内モンゴル自治区バヤンタリヤ地域を事例として—』、包格日桑吐，「美術教育」(293号)，2010，pp.28-36。
- 7) 渡辺一洋・加藤啓治・柳晋・金子仁，『日本の地域風土と自然環境を通した素材と子どもの「ものづくり」活動—造形・遊び・四季から表現行為へとつながる保育実践の検討—』，2014，育英短期大学幼児教育研究所紀要第12号，において、詳しく考察した。
- 8) 雀淑芬，『内モンゴル自治区の教育現状の一考察』，2011，筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要第6号，pp.155-165。
- 9) Bulag，『子どもの心身の発達に家畜が及ぼす影響についての考察—内モンゴル自治区のマラチン(malcin)の事例研究』，2009，関西学院大学，教育学論究(1)，pp.199-209。
- 10) 四季折々に移動することなく、ほとんど定住しながら、大自然の牧草で家畜を飼育する人々のことを「マラチン」と呼ぶ。「マラ」はモンゴル人が昔から飼育してきた五畜（牛、馬、羊、山羊、駱駝）を指し、「チン」はモンゴル人のイメージが定着している。
- 11) トリゲル・木村美智子，『地域性を生かした内モンゴル小学校美術教育の必要性』，2012，茨城大学教育学部紀要（教育科学）第61号，茨城大学，pp.77-88。
- 12) ウランバートル市は、トーラ川沿岸の標高約1,300mの場所に位置する都市。人口は1,221,000(2012年統計)で、同国の人口のおよそ半数近くが集中して居住するモンゴルの政治・経済の中心地であり、中国からロシア（欧州）に至る国際鉄道の主要な中継地である。そのため、中国やロシア風の建築物なども多い。

(2015年2月5日受理)